

〈論文〉

## 文とは何か

### 時枝国語学から現代生成言語学へ<sup>\*</sup>

中村 一創

#### 1 『国語学原論』を読み直す

ある書物が古典と呼ばれるための一つの条件は、領域に囚われない発展性を備えていることだろう。その意味で、時枝誠記の『国語学原論』は紛れもない古典である。哲学や思想史の分野からも注目される『原論』は、しかしながら、現代の生成言語学では等閑視されている。国語学は言語学の一分野だが、言語学の悪習である割拠主義<sup>1</sup>のために、時枝の著作をはじめ国語学の文献は理論言語学者にはあまり読まれない。例外は原田(1970)であるが、原田自身が早世したこともあり、彼が示した発展の可能性は忘れ去られたように思われる。

本稿で提示するのは、原田も指摘しなかった時枝国語学の新たな可能性である。具体的には、時枝の「文」という概念に関する考察を批判的に読み直すことで、現代生成言語学における難問の一つの解決を試み、『原論』が日本語のみならず通言語的な一般理論へと発展可能な体系であることを証明す

---

\* 本稿の執筆にあたって、渡邊明先生に貴重なコメントを頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

1 東京大学においても、言語学を研究する場は、文学部言語学研究室、英文研究室、国語研究室、教養学部言語情報科学専攻などに分かれてしまっている。相互の交流も盛んとは言えず、憂慮すべき状況と言える。言語学における割拠主義については、福井(2000)も参照。

る。その過程で、単なる「先駆者探し」にとどまらず、創造的に古典を読むことの重要性が理解される。

なお本稿は、分野間交流の促進という『人文×社会』誌の精神に則り、生成文法が専門でない読者にも読めるように配慮している。専門的な事項は注に回したので、厳密性を求める読者はそちらを参照されたい。

## 2 句構造

人間が生得的に持つ言語能力の解明が、生成言語学の目標である<sup>2</sup>。一口に言語能力といっても、言語にまつわる能力は多岐にわたる。語彙のリストや音韻処理、意味処理など、様々な機構が複雑に組み合わさっているはずである。複雑な対象を扱うのに便利なのが単純化である。例えば、物体の自由落下においては、空気抵抗が働くために運動は落体の法則に完全に従うわけではない。そこで、空気抵抗という余計な要素を捨象し、理想的な状況(=真空)を考えるのである。同様に、言語学においても、記憶にかかる負荷や発話、聴取といった要素を捨象し、純粋な言語の知識を考えることが広く行われている。この狭い意味での言語能力が、生成言語学の研究対象と言える。そのため、「太郎が次郎が三郎が四郎が走ったと思ったと考えたと言った」のような、ワーキングメモリーの関係で容認できない文も、狭い意味での言語能力においては何ら問題を引き起こさないと考えることが出来る。実際、「太郎が次郎が走ったと思った」「太郎が次郎が三郎が走ったと思った」のような、埋め込みが1～2回程度の文は容認可能であり、文法(=狭い意味での言語能力)とワーキングメモリーは別々に考えられる必要がある。言語能力としての文法が許容する文を文法的な文という。文法性は記憶などと並んで、容認可能性を決定する一つの要素に過ぎない(Chomsky 1965)。以降、「言語能力」という語で狭い意味での言語能力を指すことにする。

言語能力の本質は、無限の文を産み出す文法にある。というのも、広い意味での言語能力のうち、記憶や発話、聴取のような要素は人間以外の動物に

---

2 認知言語学においては、人間に固有な言語能力は存在しないとされている。しかし、Hauser, Chomsky, and Fitch (2002) 以降、言語能力は人間に固有な部分とそうでない部分が協働したものであるという見方が生成言語学においても一般的であり、その意味で生成言語学と認知言語学との溝は狭まりつつある。なお、現代における生成文法の基本的な見方については、Chomsky, Gallego, and Ott (2019) を参照。

も備わっているためである。例えばオウムは、人間の発話を聞き取り、記憶して自ら発することが出来る。しかし、デカルトが『方法序説』の中で指摘したように、オウムは人間のように無限の文を産み出すことはできず、ただ真似るだけである。では言語の無限性は何が可能にするのだろうか。脳内に蓄積された語彙自体は有限であるから、無限性の源ではない。重要なのは語彙の配列である。文の長さに制限がなければ、配列の仕方も無限になるからである。そして、文が無限に長く出来、その原動力が埋め込みにある以上 (「[太郎が[次郎が[三郎が…と思ったと]考えたと]言った]」)、階層構造を無限に生成する演算が人間固有の言語能力の核と言える。これを統辞演算 (syntactic computation) と呼ぶ。統辞演算によって形成された統辞対象物 (Syntactic Object = SO) は、言語能力の隣接領域である概念 - 意図系 (Conceptual-Intentional System) と感覚運動系 (Sensorimotor System) に送られ、前者では意味解釈を受け、後者では我々が実際に耳にする音声形式に変換される。

階層構造を形成する最も単純な方法は、要素 a と b を取ってきて、a と b の二つからなる集合を作ることだと考えられている<sup>3</sup>。これを併合 (Merge) と呼ぼう。

$$(1) \quad \text{Merge}(a, b) = \{a, b\}$$

数学的な定義上、集合の元の間には順序関係が存在しないことに注意されたい。このことは、統辞演算においては語順が決定されず、ただ階層構造のみが形成されることを意味する。しかし、階層構造に従って、文法に隣接した機構 (音韻部門) がいわば派生的に語順を決定することは可能である。例えば、{A, {B, {C}} } という構造であれば、A は構造上最も浅い (= 外側の) 位置にあり、その次に B が、そして最も深い位置に C がある。「構造上浅い要素ほど左に来るようにせよ」という規則 (Kayne 1994 参照) を立てれば、“ABC” という語順が決定される。もちろん、これだけで言語の語順問題が解決されるわけではないが、階層構造が音声形式の生成に重要な役割を果たしているのは確かである。

3 ただ、併合が階層構造を形成する最も単純な操作であることは、見た目ほど自明ではない。Hornstein (2009) のように、併合をさらに細かい操作に分ける見方もある。

併合によって形成された集合を句 (phrase) という。例えば句「太郎の本」は、次のように生成される。

- (2) a. Merge(太郎, の) = {太郎, の}  
 b. Merge({太郎, の}, 本) = {{太郎, の}, 本}

併合を繰り返し適用していけば、どんな長い文でも生成することが出来る。

では、この枠組みの中で「文」はどのように定義されるのだろうか。興味深いことに、併合操作が提案された Chomsky (1995) 以降、「文とは何か」という問いは生成文法の枠組みではほとんど議論されてこなかった。研究者たちが問題の存在に気付かなかつたためなのは勿論だが、これには研究史的な理由もある。もともと、1950年代から標準的に採られていた理論的モデルでは、階層構造は句構造規則という併合とは異なるタイプの規則の集合で生成されると考えられていた。句構造規則は以下のような線形列の間の「書き換え系」として定義される。

- (3) XYZ → XWZ

これは、「X と Z に挟まれた Y という要素を、W という要素に書き換えろ」という指示である。X と Z の指定は無くても良く、その場合 (3) は文脈自由句構造規則 (context-free phrase structure rule) と呼ばれる。X もしくは Z の指定がある場合は文脈依存句構造規則 (context-sensitive phrase structure rule) となる。例えば、名詞句 (*the man* など) が指示詞 (*the, this* など) と名詞から成ることは、次の (文脈自由) 句構造規則によって表される。

- (4) 名詞句 → 指示詞 名詞

句構造規則は繰り返し適用することができる。

- (5) 動詞句 → 動詞 名詞句

(5) は他動詞を中心とした動詞句を生成する規則である。(5) の後に (4) を適用すれば、*criticize the man* のような動詞句が生成される。句構造規則を繰

り返し適用することで、併合の場合と同じく、無限の長さの文を構築することが出来る。

さて、句構造規則は何らかの記号を別の記号に書き換える規則であるから、始発記号を定める必要がある。1950年代の理論では、この始発記号が「文」であるとされていた。「文」に句構造規則をかけていくことで、我々が通常目にする文が生成される。

#### (6) 文 → 名詞句 動詞句

例えば *The woman criticized the man.* は、(6)、(4)、(5)、(4) の順で句構造規則を適用することで生成される。文を始発記号として生成された列は、当然、全て文である。つまり、句構造規則モデルにおいては、文とは何かという問題は生じようがなかった。妥当な句構造規則の集合を想定する限り、文でない列は生成されないのである。

しかし、句構造規則には致命的な欠陥があった。複雑すぎるのである。一つ例を挙げよう。動詞句を書き換える規則を日本語でも考えてみる。

#### (7) a. その男を批判する b. 動詞句 → 名詞句 動詞

(7a) での動詞と名詞句との関係は、*criticize the man* におけるそれと同じく、ある動作の対象がある名詞句であることを示している。併合モデルにおいては、順不同の集合形成によって、語順とは独立した意味関係の同一性を炙り出せる。つまり、どの言語においても動詞とその目的語の意味関係は、動詞と名詞句との併合で形成されると考えられ、語順という言語間の差が大きい「余計な」要素を捨象できるのである。一方、句構造規則は線形列を指定するので、英語 (5) と日本語 (7b) とで別々の規則を立てざるを得ず、こうした一般化を許さない。しかも、幼児が言語を獲得する際に、個別言語ごとに異なる句構造規則を大量に覚えなければならなくなり、幼児の言語獲得が短期間に、乏しい言語刺激の下で行われることと矛盾してしまう。

そこで、言語能力から余分なものを可能な限り取り除く「極小主義プログラム (Minimalist Program)」の旗印のもと、最も単純な階層構造の構築操作

であるとして併合モデルが提案されたのだが<sup>4</sup>、トップダウン式に階層構造を構築する句構造規則と違って、併合モデルはボトムアップ式の方法である。句構造規則には始点(「文」)があるが、併合モデルには終点がなく、いくらでも併合操作をかけていける。そのため、句構造規則モデルでは自明だった文の概念が宙に浮いてしまうのである<sup>5</sup>。残念ながら、このことを主題として論じた研究は少なく、「文とは何か」という問題は、1990年代以降の生成文法の研究史において、まともにとり上げられたことがないと言っても過言ではない。筆者の知る限り、次の(8)が全て文であり、(9)が文でないことを説明する理論は存在していない<sup>6</sup>。

- (8) a. その子がケーキを食べた。  
 b. その子がケーキを食べたの / か?  
 c. The boy ate the cake.

4 実際の研究史ではこの間に X ̄理論という過渡期の理論があり、果たした役割も小さくないが、本稿では触れない。渡辺(2009)などを参照。

5 句構造規則モデルにおいては、規則に沿って生成された列はすべて文であると同時に文法的でもあったがために、文らしさと文法性が同一の指標であったと言える。しかし、併合モデルの導入により、(生成文法学者たちがそうと意識しないままに)文らしさという概念が文法性と分離され、前者は顧みられなくなったと言える。

なお、文概念が放置されてしまったことの間接的要因として、全範疇への X ̄理論の適用がある。例えば Chomsky (1986) の枠組みでは、埋め込み文は次のような構造を持つと考える。

(i) [<sub>CP</sub> that [<sub>IP</sub> John ate the cake]]

*that* を含む句全体は文ではないが、IP 自体は文として理解される。言い換えれば、平叙文は IP レベルの現象である。一方、疑問文は CP レベルの現象であって、これらを「文」として貫き、かつ (i) の CP を文として解釈させないような何らかの理論的装置が必要なはずである。しかし、そのような問題提起はなされず、構造構築操作に関する議論は 1980 年代を通して下火になった。トップダウン式の構造構築の利点は忘れ去られ、生成文法の理論は文概念自体を意味のないものとして、研究対象から外す方向に進んでしまった。

6 Emonds (2004; 2012) などは主語 - 助動詞倒置がなぜ起こるかという問題について一応の解答を与えているが、統辞論において不自然な想定を必要とするため、妥当な仮説とは言えない。

- d. Did the boy eat the cake?
- e. Which cake did the boy eat?

- (9)
- a. その子がケーキを食べたと
  - b. that the boy ate the cake
  - c. if the boy ate the cake
  - d. which cake the boy ate

これらの対照を説明することが本稿の技術的課題である。

### 3 『原論』における文の定義

「文とは何か」という問いは、言語学史においては古典的な問題であるが、いまだに満足できる解答は出ていない。文を定義することは非常に困難なのである。ソシュールも次のように言っている(以下、英語以外の欧語文献の引用は訳書のページ数に従う)。

- (10) われわれの口にするのできる文の総体を想像してみると、そのもっとも目につく特質は、それらのあいだに寸分の似寄りもないことである。(Saussure 1916: 149 ページ)

そして、「文は言 [= パロール: 筆者注] にぞくし、言語 [= ラング] にはぞくさない (Saussure 1916: 174 ページ)」と結論づけている。文が言 (パロール) の領域に属するなら、人間の内在的言語知識 (ラング) には文の概念が入る余地がない。また、イエームスレウは、文の定義をめぐる論争を総括して次のように言っている。

- (11) ところで文は言語学的秩序の概念ではないようである。文の定義を下すことはすこぶるむずかしい。しかし、H. Paul なり Wundt なりが例のなかで与えた定義から判断するならば、言語学的概念であるただ単なる分節系列の概念と、文のそれにいつそう近いけれども言語学とはなんの関係もない論理的命題といういつそうせまい概念との、いずれかを選ばねばならぬものようである。John Ries は、形

態論的分析をほどこして得られるものは、けっきょく3種類の要素；音声、語、連語 (Wortgefüge) しかないことをはっきり証明した。かれは正当にも次のようにつけ加える：「しかし形態的分析もやはり文を見出さない。いつそう深い考察によって、文とよばれる連語のかくべつ形態的な特徴が認識できると仮定するならば - その反対の可能性もアプリアリには否定できないが -、それによって多量の連語のいつそうこまかい区分にたいするいつそう確実な手がかりがえられるであろう。」われわれの研究の現状はまずまずこのあたりである。(Hjelmslev 1928: 25-26 ページ)

イエラムスレウの言う「われわれの研究の現状」は、今日まで変わっていない。20世紀前半における、言語学的概念としての文の定義に対する諦念もしくは無関心は、現在の生成文法と奇妙なまでに似ている。実際、2010年代の生成文法研究の総括ともいえる Chomsky, Gallego, and Ott (2019) も、“[T]he informal notion “sentence” [is] now abandoned in favor of hierarchically structured objects.” (232 ページ) などと言い、文という概念の存在自体認めていない。

一方、時枝は文という概念を積極的に捉える。

- (12) 私は、何よりもまず、ある基準に基づいて、文と文にあらざるものとの限界あるいは文の実在性を予め決定しようとする態度を拒否しようと思う。むしろ私は、我々の持つ統一体としての文の意識がいかなるものであり、いかなる根拠によって我々は文なるものを考えているかを最初に考えたいと思うのである（『原論』328 ページ、仮名遣いを改めた。以下の引用も同様）

時枝は、イエラムスレウの引用にあるような、発話をあたかも自然物のように見て、外的な基準によって文とそうでないものに分類する考え方を否定する。実際、我々がどのような単語列が文であるかを生まれつき判断できるのは、内的な言語意識と言わざるを得ない。時枝はまた次のように指摘する<sup>7</sup>。

7 以下の引用にもある通り、時枝の文概念の批判は単語概念の批判と対をなしている。単語概念の批判については、対象言語が日本語であるという制約もあって、それほ

- (13) 言語における単語が単位といわれるのは、分析の極に到達した原子的単位の意味においてではなく、それは質的単位の意味においてでなければならない。質的単位とは、主体的意識において認定せられた一の全体概念であり、統一体の概念である。かかる概念が予定されるがために、それを基準として、我々は与えられた音声の連鎖を、二単語の結合であるとか、三単語の結合であるなどと分割することが出来るのである。文についても同様であって、予め認定された統一体としての文の概念があって始めて[原文ママ]一個の文二個の文と判定することが出来るのであって、問題はかく主体的に認定された単位としての単語あるいは文の本質が学問的にいかに説明されるかということである。（『原論』220 ページ）

イエラムスレウの引用にあるような、形態面から文を定義しようとするやり方がうまくいかないのは、言語をあたかも話者の言語意識から離れた対象物であるかのように扱ったためである。文の概念は話者の言語過程に入り込むことによってのみ理解される。時枝はこうした思考の過程で、山田孝雄の統覚作用による文の定義に着目している（以下は『原論』332 ページにおける引用）。

- (14) 実に語と文との区別の要点は上にもいえる如く、意識の注点の活動と否とに存するものなり。即ち考うるに、一の語又は語の数多の集合点が、文とするを得る所以のものはその内面に存する思想の力たるなり（山田 1936: 901 ページ）
- (15) 一の思想には必ず一の統合作用存すべきなり。今これを名づけて統覚作用という。この統覚作用これ実に思想の生命なり。この統覚作用によりて統合せられたる思想の言語という形にてあらわされたるもの即ち文なりとす（山田 1936: 901 ページ）。

---

ど興味深い仮説を提出しているとは言えないが、問題提起としては非常に重要である。いわゆる分散形態論 (Distributed Morphology; Halle and Marantz 1993) の勃興以降の生成言語学にとって、単語とは何かという問いは文とは何かという問いと同程度に本質的である。ただ、単語の定義の問題は紙面の都合もあり、本稿では述べない。

- (16) 統覚作用とは、意識の結合作用を汎くさせるものなれば、説明、想像、疑問、命令、禁制、欲求、感動等一切の思想を網羅するものなり。(山田 1936: 917-918 ページ)

山田は、文はただ単に命題を表すものではなく、主体による事態の総括に本質があるとした。この点で Austin (1962) に近い考え方をしていると言えるが、時枝はまだ満足しない。山田が統覚作用を専ら用言に求めているためである。例えば「妙なる笛の音よ」という文では、用言「妙なる」は「笛の音」を修飾しているだけで、文全体を総括しているわけではない。

時枝はこの難点を、詞と辞の区別の観から解決しようとする。詞と辞とは、前者が客観的な素材・概念を表すのに対し、後者は純主観的な態度を表す語のことをいう。詞には名詞・形容詞・動詞などが、辞には助詞・助動詞などが分類される。先程の例で言えば、「妙なる笛の音」だけではただの事物もしくは概念であり、そのため文とは見なされない。しかし、「よ」という詠嘆を表わす助詞(辞)によって主体の態度を明らかにすることで、文として完結させることが出来る。時枝の言葉を借りれば、「客体を主体的なるもので包み、ある一の主体的統一を表している」のである。

なお、学校文法でいう自立語・付属語の区別とは、少しずれていることに注意されたい。自立語・付属語は、語が単体で存立できるかという形態面のみに着目した区別だが、時枝の詞・辞の区別は機能面からの区別である。例えば、「る」「らる」「す」「さす」「しむ」のような受身・使役などを表す助動詞は、付属語であるが辞ではない(『原論』第二篇第三章第二節)。主体の態度を表すのではなく、客観的な事象を表す手助けをしているに過ぎないからである。あくまでこれらの助動詞の機能は、動詞だけでは表現しきれない、文内部の名詞間の関係を構築することにある。

話を元に戻すと、時枝は文の満たすべき条件を以下の二点にまとめている。

- (17) a. 統一性  
b. 完結性

(17a) の統一性は、上述した主観的な辞による客観的な詞の統一のことである。(17b) は、文を統一する辞が完結するところの辞でなければならないと

いう条件である。例えば、「花は」「雨降るべく」「美しけれども」が、辞によって全体を統一した表現でありながら文と見なされないのは、「は」「べく」「ども」が未完結な辞であるからである。「は」は主に名詞を話題化させる機能を持つが、それだけでは文全体を総括することはできない。「べく」は「べし」の連用形であって、文を終わらせることができない。「ども」も接続助詞であるため、後ろに何らかの要素が続かなければならない。

ただ、完結性の条件については不十分な感が否めない。というのも、「完結」という言葉によって時枝が意図するものは機能・形態の両面に亘る漠然とした概念であり、ともすれば文末に来る辞・形態は完結性があるといった循環論に陥る可能性があるからである。これを解決するには、次のように文の条件を修正する必要があるように思われる。

(18) 文は、ある命題に対する主体の態度を表す助詞・助動詞によって統一されなければならない。

(18)のうち助詞の部分は、学校文法で終助詞と呼ばれているものに一致する。もちろん(18)の条件に加え、「べく」のような形態を排除する規則が必要であるが、これは文の規則が決めるべきことではない。「そうだ」「らしい」のような終止形接続の語が存在する以上、文は終止形という形態が現れる一つの環境に過ぎず、むしろ終止形活用のルールにおいて定められるべき規則である。言い換えれば、語順と同じく、表面的な形態は言語能力が可能にする統辞演算の出力から、派生的に決定されるものなのである。

助詞・助動詞のない文については、時枝はゼロ記号の助詞もしくは助動詞が存在するとしている。しかし、ゼロ記号の助詞・助動詞なるものが本当に存在するのには怪しいところであり、やはり循環論に陥る可能性が大きい。そもそも、時枝がゼロ記号を提案したのは詞辞論を一貫してすべての文に適用するためであり、経験的な証拠があるわけではない。結局、次のように用言自体が統一作用を持っていると考えるのと同じなのである。

(19) 文は、用言もしくは終助詞によって統一されていなければならない。

以下、(19)を正しいものとして論を進める。

## 4 英語への応用

(19)の文の定義には、まだ不十分な点が含まれている。「統一」という機能が、どのような構造的条件によって可能となるのか明らかでないためである。(9a)で示したように、単に終止形の用言が存在するだけでは全体が「統一」されているとは言えない。文の定義には構造的条件が関わっており、それを抽象的な形式で明らかにすることで、通言語的かつ強力な仮説へと昇華させることが出来るのである。

日本語だけを見ていると、あたかも最後に来る要素が統一機能を持っていれば文として解釈されるように見える。しかし、英語をはじめとするヨーロッパ言語に目を移すと、これが正しくないことが直ちに分かる。例えば、英語においては文の最後に動詞が来ない場合が大半である。逆に文頭に動詞が来るのも、疑問文や命令文など限られた場合のみである。そのため、線形順序は通言語的な文概念の構築の土台としては不適切である。

実際、併合モデルにおいては、統辞演算は併合のみで構成されており、線形順序のような、併合によって定義されない性質に基づいて文を定義するのは難しい。第2節で見たように、併合が定義するのは階層構造のみである。そのため、階層構造に基づいた定義を考えなければならない。

時枝も、線形順序に訴えることが間違いであることに気づいていた。彼は言語には入れ子式の階層構造があり、次のように詞が辞を伴うことではじめて別の詞に埋め込まれることを指摘している。

(20) [詞 [詞 [詞 太郎 - 辞 の ] 本 - 辞 の ] 表紙 ]

そして、文の場合は文全体が辞によって包み込まれている必要があるとする。

(21) [詞 太郎が本を出す - 辞 らしい ]

この構造図から見てとれるように、文を統一する要素は階層構造で最も浅い(=外側の)位置になければならないと考えられそうである。そこで、以下のように(19)を修正しよう<sup>8</sup>。

8 なお、Baker (2008)などは、主節や一部の従属節のCP領域に話者・聴者の要素が

(22) 構造上最も浅い位置に用言もしくは終助詞がある句を文と呼ぶ。

では英語の場合はどうだろうか。

(23) The student may criticize the teacher.

考えられる構造は次のようなものである。

(24) {{the, student}, {may, {criticize, {the, teacher}}}}

日本語とは違い、「最も浅い要素」が一つに決まらないが、助動詞 *may* が *the*、*student* と並んで最も浅い要素の一つとなっており、これが (24) が文である理由だと考えられる。このように、併合という線形順序を捨象した演算操作によって、日本語と英語に通底する普遍的原理が理解される。

この分析は、平叙文以外の文タイプにおいても威力を発揮する。疑問文の場合を考えてみよう。

- (25) a. その子がケーキを食べたの？  
b. Did the boy eat the cake?

---

存在しているとしているが、人称要素によって文が定義されているわけではないことに注意されたい。Baker の仮説を見ても、主節 (matrix clause) が何かという問題は仮説の主題ではなく、何らかの形で主節と定義されたものに話者・聴者の要素を持つオペレータが出てくるという見方をしているようである。

- (ii) All matrix clauses and certain embedded clauses have two special null arguments generated within the CP projection, one designated S (for speaker) and the other A (for addressee) (Baker 2008: 125)

実際、Baker の主張する CP 領域の人称要素は不可視的であり、様々な工夫によって間接的に炙り出さなければならない。そうした要素が文と呼ばれる全ての句に存在し、そうでないものには存在しないとするのは、時枝のゼロ記号同様、反証可能性の著しく低い仮説である。むしろ、人称要素が導入される条件として (22) が働いており、文の定義の本質はこちらにあるとした方が自然である。

疑問文形成の仕方は日本語と英語で異なる。日本語の場合、文末に「の」「か」といった終助詞を足すことで疑問文が作られる。一方、英語では主語と助動詞を倒置させる。なぜこのような差が生じるのだろうか。そして、なぜ英語では次のようなものを直接疑問文として扱えないのだろうか。

(26) if the boy ate the cake

(22) の仮説からすると、英語においては動詞・助動詞もしくは終助詞に相当するものが構造上最も浅い位置になければならない。ifが終助詞でないとすれば、(26) が文にならない理由は説明できる。(26) は以下のような構造を持っていると考えられ、動詞である *eat* が最も浅い位置にないためである。

(27) {if, {{the, boy}, {ate, {the, cake}}}}

しかし、if節を間接疑問文として解釈することは可能である。間接疑問文は他の文に埋め込まれていれば、それ自体が文の定義を満たしている必要はない。文は機能的には談話上の一つのまとまりをなすものであり、間接疑問文はその枠に入らないためである。

ifには、疑問文を標示する機能がある。この機能を可能にするQという要素が存在し、Qが音形をはじめとする他の要素・機能と組み合わせると、ifのような単語になると考えてみよう。英語の疑問文ではQが全体を統一することが不可欠だとすると、直接疑問文でも構造上最も浅い位置にQが必要なはずである。以下、Qを持った要素を  $X_{[Q]}$  で表す。

(28) {if<sub>[Q]</sub>, {{the, boy}, {did, {eat, {the, cake}}}}}

しかし、構造上最も浅い位置にいるifは動詞・助動詞ではないため、このままでは文として成立しない。そこで、(22) の条件を成立させるためには、Qを持った *did* が最上部で併合されればよい。

(29) {did<sub>[Q]</sub>, {{the, boy}, {did<sub>[Q]</sub>, {eat, {the, cake}}}}}

すでに統辞演算に入っている要素をもう一度併合することを内的併合 (Internal Merge) と呼ぶ。内的併合は、下のコピーが発音されなければ、表面的に「移動」と同様の効果をもたらす。助動詞 *did* が最も浅い位置に併合されたことで、(29) は文の定義を満たすことができる。

なお、WH 疑問文の場合も同様の説明が可能である。

(30) {{which, cake}, {did<sub>[Q]</sub>, {{the, boy}, {~~did~~<sub>[Q]</sub>, {eat, {which, cake}}}}}}

WH 句も内的併合を起こしていると考えられるが、上の構造から明らかのように、助動詞 *did* は最も浅い要素の一つであるから、問題なく文の定義を満たしている。

さて、興味深いのは、英語の *if* と日本語の「か」との対比である。どちらも間接疑問文では不可欠な要素であるが、英語と違い日本語では直接疑問文のマーカースとして働く。これは、前者が接続詞である一方、後者は終助詞であることを示唆している。実際、*if* と「か」には次のような用法もある。

(31) If John comes back, please tell me.

(32) 今日でもう 2 月か。

*if* には条件節を導く用法、「か」には感動を表す用法があり、前者は接続詞、後者は終助詞以外の品詞として解釈できない。幼児が言語獲得をする際にも、上のような異なる用法によって品詞を確定しているとすれば、直接疑問文における両者の差の理由が理解される<sup>9</sup>。

9 ただ、より深い原理が関わっている可能性もある。そもそも英語には終助詞のシステムとおぼしきものは存在しない (Kayne 2016 参照)。逆に、Fukui (1986) などは、日本語には英語のような補文標識 (従属文を導く *that* や *if* のような要素) のシステムは存在しないと、そうした機能範疇のシステムの有無が一致現象の有無と結び付いているとしている。Richards (2007)、Chomsky (2008) の主張に従って、補文標識が助動詞と一体となって一致現象 (*I am*, *you are* のように主語によって動詞が形を変える現象) に関わっているとすれば、一致現象の有無から *if* と「か」のカテゴリーの違いが導出されるかもしれない。日本語には一致現象は存在しないため、補文標識も存在せず、「か」が補文標識として獲得されることはない。一致現象の

こうして、(8)と(9)の対比はすべて説明され、背後にある文概念の一般原理が明らかになった。

## 5 結語

『国語学原論』の先進的だったところは、文という概念が、我々の言語意識の中にあるリアルな存在であり、従って言語意識の側から明らかにされなければならないことを説いた点、そして、不十分な形ではありながら文の定義の具体的な形式を明らかにした点である。

しかし、『原論』の文概念を論じた部分は、生成言語学の分野ではほとんど注目されてこなかった。句構造や内在主義の先駆的業績であることは昔から言われてきたが、現代の理論を超越するような考え方として論じられたわけではなかった。先駆者探しをしたところで、思想史的には面白くても分野の発展には貢献しない。原田(1970)は例外的に、言語運用の理論という当時未開だった分野を開拓する手がかりとして時枝国語学を「利用」しようと考えていたようだが、草案だけで終わってしまった感がある。

古典は分野を超えて常に「利用」され続けなければならない。古典の古典たる所以は、様々な分野、時代に応じて姿を変え、読まれ続ける発展可能性にある。『原論』の例で言えば、第2節でも論じたように、文概念の部分は1990年代になってはじめて意義深いものになった。一方で1970年代には、原田のような読み方が当時の理論を発展させる上で重要だった。今後も新たな読みを創造していくことが我々に求められている。実際、例えば文の概念には、主語の必要性や移動可能性といったさらなる比較統辞論上の展開も期待される。『原論』の発掘作業は、まだ始まったばかりなのである。

## 参考文献

デカルト, ルネ(1637)『方法序説』(谷川多佳子訳, 東京: 岩波書店, 1997年)  
時枝誠記(1941)『言語学原論』東京: 岩波書店.

---

有無はおよそどんな文からも観察できる言語事実であり、幼児が言語を獲得する際に、その言語がどんなタイプであるのか判別するのに手頃である。一方、英語において終助詞が存在しないのは、助動詞の上の要素はそれと一体となった補文標識(Chomsky 2008)としてしか解釈されないためだと考えられる。

- 原田信一 (1970) 「時枝文法と生成文法」, 『英語文学世界』 3月号, 30-33.
- 福井直樹 (2000) 「後続く世代からみた原田信一の存在と非在」, 福井直樹 (編) 『シンタクスと意味—原田信一言語学論文選集』, 東京: 大修館書店, 780-785.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 東京: 宝文館.
- 渡辺明 (2009) 『生成文法』 東京: 東京大学出版会.
- Austin, John L. (1962) *How to do Things with Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Baker, Mark C. (2008) *The Syntax of Agreement and Concord*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases.” in R. Freidin, C. Otero and M. Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*. Cambridge, MA: MIT Press, 133-166.
- Chomsky, Noam, Ángel J. Gallego, Dennis Ott (2019) “Generative Grammar and the Faculty of Language: Insights, Questions, and Challenges.” *Catalan Journal of Linguistics*, Special Issue: Generative Syntax, Questions, Crossroads, and Challenges, 229-261.
- Emonds, Joseph (2004) “Unspecified Categories as the Key to Root Constructions.” in D. Adger, C. de Cat, and G. Tsoulas (eds.) *Peripheries: Syntactic Edges and their Effects*. Amsterdam: Kluwer, 75-120.
- Emonds, Joseph (2012) “Augmented Structure Preservation and the Tensed S Condition.” in L. Aelbrecht, L. Haegeman, and R. Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*. Amsterdam: John Benjamins. 23-46.
- Fukui, Naoki (1986) “A Theory of Category Projection and its Applications.” Ph.D. diss., MIT.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection.” in *The View from Building 20: Essays in Linguistics*

- in Honor of Sylvain Bromberger*. Cambridge, MA: MIT Press, 111-176.
- Hauser, Mark D., Noam Chomsky, and W. Tecumseh Fitch (2002) “The Faculty of Language: What is it, who has it, and how did it evolve?” *Science* 298 (5598), 1569-1579.
- Hjelmslev, Louis (1928) *Principes de grammaires générale*. Copenhagen: Bianco Lunos Bogtrykkeri. (小林英夫訳, 『一般文法の原理』, 東京: 三省堂, 1958年)
- Hornstein, Norbert (2009) *A Theory of Syntax*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kayne, Richard S. (2016) “The Silence of Heads.” *Studies in Chinese Linguistics*, 37(1), 1-37.
- Richards, Marc (2007) “On Feature-Inheritance: An Argument from the Phase Impenetrability Condition.” *Linguistic Inquiry* 38(3), 563-572.
- Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot. (小林英夫訳 『一般言語学講義』 東京: 岩波書店, 改訂版, 1972年)